

資 料

# 看護専門職を志す学生の職業社会化と 「決意を新たにするセレモニー」開催の意義 —戴帽式に代わる旭川大学 YELL\* 挙行からの一考察—

The Significance of Holding “A Ceremony for Nursing Students to Reaffirm  
Their Determination” and The Occupational Socialization:

Thoughts on Replacing The Capping Ceremony with *The YELL Program at Asahikawa University*

安川 緑

Midori YASUKAWA

旭川大学保健福祉学部保健看護学科

Keywords: 看護学生 職業社会化 セレモニー 通過儀礼 戴帽式

## I. はじめに

看護学を専攻する学生のほとんどは、卒業後の職業を「看護師」（保健師、助産師含む）と定め、入学する。看護師として就業するためには、所定の単位数を修得しかつ看護師国家試験に合格しなければならない。明確な職業選択を前提とした就業前の看護教育課程では「職業社会化を促進する機能が働き」<sup>1)</sup>、看護師にふさわしい資質（看護専門知識・技術、職業理念や態度、倫理観）の涵養に力が注がれる。職業社会化とは、「その職業における価値や規範、態度や行動様式を受け入れ内面化しながら、その職業に特有の知識や技術を習得し、自己概念を変容させながら職業アイデンティティを形成していく過程」<sup>2)</sup>であり、このことは、看護教育上において重要な側面を担っている。

かつて看護教育機関で広く行われていた「戴帽式」（キャッピング・セレモニー）には、看護学生の職業社会化において特別な意味と役割が課せられていた。しかし、2000年頃から、看護師の象徴の一つであったキャップの着用を、感染防止上の理由から廃止する病院が増えたことや、看護師の白衣がワンピーススタイルからパンツスタイルへと移行していったこと、また、男性看護師の増加等によって、戴帽式廃止に拍車がかかり、一部の看護専門学校などを除き今ではほとんど見られなくなっている。

近代看護の創始者と称されるF・ナイチンゲールが、看護の仕事に「calling」と呼んで看護には天職や使命という意味がある<sup>3)</sup>と指摘したように、看護師には、病める人に寄り添い、人の生命を護り健康を支える、という職業上の明確なミッションが存在する。

本稿では、昨年11月にコロナ禍において挙行された旭川大学 YELL（エール）を概括し、そのセレモニーが学生にどのような変化や意味をもたらしたのかを明らかにすると共に、かつての「戴帽式」に代わる、看護師となることへの「決意を新たにするセレモニー」の現代的意義や、看護師育成における教育的効果について考察し、課題について言及する。

\*従来用いられてきた呼称は「YELL」であるが、英辞書によると大声で叫ぶなどと訳されるため、本稿では誤解が生じないようイタリック体を用いて「旭川大学 YELL」と表記している。

## II. 旭川大学 YELLの生い立ちから現在までの経緯

旭川大学に保健看護学科が設置されたのは2008年4月のことである。保健看護学科では、建学の理念であるところの「地域に根ざし、地域を拓き、地域に開かれた大学」に基づき、地域の人々の健康を支える優れた看護師育成のための学部教育がスタートした。

開設から3年を経た2011年、入学後初めての病院実

習に臨む学生に、看護学を学ぶことへの動機づけを明確化する機会を設けてはどうかとの提案が出されたことを機に、「旭川大学YELL」が誕生した。YELLと名付けられたのは、「声援を送る、元気づける」などの意味が込められてのことであると聞き及んでいる。

2011年から2014年までの間は、我が国の看護学分野で顕著な功績をあげられた看護学研究者を毎年1名ずつ招いて講演会を兼ねて開催されていた(年度順に、紙谷克子氏、石垣康子氏、中島紀恵子氏、川島みどり氏)。その後、人選や予算上の都合により、地元の総合病院である旭川医科大学附属病院と旭川赤十字病院の看護部長に依頼して所属病院の紹介を絡めた臨床看護師の役割等についての講話として開催されるようになった。また、毎年卒業生2名を招いて先輩ナースの講話も依頼している。式典では、学長、副学長、学科長から祝辞が述べられ、当該学生らが個々に看護師となることへの決意や実習に臨む意気込み等を所定の紙に記し、壇上にて発表するという形式がとられてきた。そして最後は、学年代表によるお礼の言葉で締め括られた。2014年以降は、在学生からお祝いの花一輪が贈られるようになり、2019年からは在学生代表祝辞も加わった。セレモニーは毎年、3時間から2時間半程度を割いて挙行されている。

2020年以降、旭川大学YELLは対象学年を2年生に変更して実施することとなったため、2020年度のセレモニーは行われなかったが、本年11月、コロナ禍において、初めて2年生を対象とした旭川大学YELLの開催となった。以下に、今年度の旭川大学YELLの進め方、実際のセレモニーの概要について述べる。

### Ⅲ 今年度の旭川大学YELLの開催について

#### 1. 検討からセレモニー挙行までの道のり

開催に際しての最大の課題は、感染防止対策であった。年度当初の予定では見送られる可能性も高かったが、オンライン授業や外出制限が続いてきたことよって、学生の臨地実習への不安感や、精神的疲弊が高じてきていること、また、コロナ禍だからこそ挙行する意義があるのではないかと担任会議での意見などを勘案して、2021年8月の学科会議において、2年生担任団(以下、担任団と称す)から、「2021年度YELLプロジェクト企画について」と題した資料が配布され、実施に向けた本格的検討が始められた。学科会議では、まず、旭川大学YELLが有する2つの目的、すなわち、①保健看護学科に入学した学生が、改めて、

看護を学ぶことの意義を再認識する機会であることや、②看護職者を目指す当大学の学生や教職員、保護者、看護師として活躍する既卒者らから、看護師への道を歩み出した学生への応援メッセージを贈る機会となってきたことの確認が行われた。そうした機会を得られないことは、看護師を目指す学生にとっての情操教育やモチベーションアップ等の貴重な機会を失する等、当大学の看護学教育上、多大なる損失となる点について、担任団を代表して筆者が説明を加えた。COVID-19の感染防止が優先される現状を踏まえて、「このような社会情勢だからこそ」有意義な「旭川大学YELL」の実施には価値があることを強調したほか、感染防止に配慮した実施計画案を提示し、挙行に向けて検討していくことが決定された。

| YELL2021<br>看護師への道 ～新たな決意を胸に |  |
|------------------------------|--|
| 開催日:2021年11月27日(土)           |  |
| 時間                           | 内容   |
| 9:45                         | 会場(251教室)に集合   |
| 10:00                        | 開会宣言   |
|                              | ☆ビデオ放映スタート<br>・学長エール<br>・保健福祉学部長エール<br>・卒業生エール(3名)<br>・在校生エール(2名)<br>・保健看護学科各教員からのメッセージ<br>☆保健看護学科長エール |
| 10:45-11:00                  | ☆2年生各学生が個別に決意記入<br>☆実習グループごとの目標を記入   |
| 11:10-11:15                  | ☆2年生への花一輪贈呈(贈呈者:3年生6名)   |
| 11:15-11:25                  | ☆2年生代表 お礼の言葉   |
| 11:25                        | 閉会宣言   |
| 11:30-11:45                  | 写真撮影(集合写真・実習グループ別写真)<br>アンケート記入  |

\*式典の進行過程では、時間的に多少前後することをご承知お下下さい。

【伝達事項】

- ・YELLは、あらためて、看護師となることへの決意を明確にするセレモニー(式典)です。ユニフォーム、ナースシューズ、頭髪等、身なりを整えて参加してください。
- ・当日のライブ中継は中止となりました(式典の様子等を編集・作成する予定)。
- ・各自、決意文を記載するためのペン(色違い数本)を持参すること(後方の記入用机の上にグループ別においておく) \*一定期間、看護学科棟に掲示予定
- ・YELLの式のあいだは私語厳禁とし、姿勢をまっすぐに正し、手は膝の上に置くこと
- ・マスクは不織布の白を着用すること
- ・式の途中は写真撮影等を行うため、正面からの顔写真を避けてもらいたい学生は、チームスから個別に山口先生に伝えておくこと。また、確認したい事柄等あれば、チームスから山口先生宛にメッセージを送信し、回答をもらうこと

以上

図1. 学生に事前配布した文書

本企画は2年生担任の筆者を含めた4名の教員により進められ、年度初めに「2021年度YELL」の担当に割当てられていた筆者がその統括の任に預かった。開催までの期間が例年よりも短く、担任団の会議も十分には持てなかったため、Teamsを活用して終始、

相互に連絡を取り合い、意思疎通に努めた。

祝辞を依頼する方々の選定は担任団の合議として決定した。事前撮影及び動画編集に係る全作業を筆者が担当し、完成したDVD動画を当日会場にて上映した。当初の予定では、当日のセレモニーの映像を会場からオンラインで学生の家族や学内関係者に配信すること

になっていたが、個人情報保護の観点から中止となり、後日大学のHP上での報告をもってそれに代えることとなった。

2年生の学生への連絡も全てTeamsを通じて行われた。事前に、参加に際しての諸注意や式次第を記載した資料(図1)を配信して、当日に備えた。

## 2. 旭川大学YELL—当日の実施概要

当日の報告は挙行後、下記のような内容で大学のHPに掲載し、大学内外への周知を図った。

(以下、大学HP掲載ページからの転用)

### 「YELL 2021 看護師への道～新たな決意を胸に」が開催されました！

去る11月27日(土)、保健看護学科の2年生を対象とした、看護師となることへの決意を新たにするセレモニー、「YELL 2021～新たな決意を胸に」が開催されました。当日は、対象学年である2年生56名の参加と、教員22名の臨席の下、コロナ禍であることを忘れさせるかのような心温まる式典となりました。

式典では、安川緑教授が司会進行役を務め、藤原潤一学長(写真1)はじめ高波澄子保健福祉学部長(写真2)、卒業生3名(写真3)、在校生2名(写真4)から、映像を通じた励ましのエールが次々に贈られました。卒業生や先輩在学生からの応援メッセージでは臨地実習への向き合い方や学生生活へのアドバイス、そして患者さんとの触れ合いを通じ



写真1



写真2



写真3



写真4

てあらためて気づかされた看護の魅力などが語られ、その言葉の一つひとつが学生たちの胸に刻み込まれました。

澤田みどり学科長からは、会場において直接、学生へ向けた力強いエール・メッセージが贈られました。「臨床の現場でしか体験できないこと、目の前にいる患者さんをよく観て、訴えをよく聴き、それはどういうことなのだろうかと自分でしっかり考えること。そして感謝の心を忘れずに学んでほしい。」との熱いメッセージは、これまでの間コロナ禍のために見送られてきた臨地実習を前にした学生たちのこころを奮立たせました(写真5)。



写真5

次に、応援メッセージを受けて、2年生はそれぞれの「決意」をカードに記しました(写真6)。カードには、「今の自分にできることを一生懸命に行いたい」「患者の個性を考えて、患者中心の看護を心がける看護学生として成長したい」「感謝の気持ちを忘れずに、患者と自分に向き合いたい」等々、思い思いの言葉が綴られ、気持ちを新たにしました。



写真6

続いて3年生から、「YELL・フラワー」のガーベラを一輪ずつ、励ましの言葉と共に手渡されました(写真7)。

最後に、2年生を代表して田宮圭那さんが、「看護専門職を目指す者としての責任と誇りを胸に、人間性を磨き、看護の専門知識と技術の向上に努めてまいります」とお礼の言葉を丁寧に述べて締めくくりました(写真8)。



写真7



写真8

節目となる式典を無事終えた学生たちからは、「卒業生や先輩からのメッセージに励まされ、目標ができた」「(看護師になることへの)モチベーションが高まった」「先生方からのメッセージが嬉しかった」などの感想が聞かれました。その後、ガーベラを手に記念撮影に臨み、会場には学生たちの笑顔が溢れました(写真9)。



写真9

今年度のYELLは、COVID-19の感染拡大に配慮して事前撮影を行い編集した映像を会場で上映するという新しい形での開催となりましたが、ご登壇いただいた皆様の愛に満ち溢れたメッセージの数々は、これから始まる基礎看護学実習Ⅱに向けての何よりの励ましとなり、2年生の彼らに看護を学ぶことへの期待をいっそう膨らませたことでしょう。

最後に、ご多忙中にもかかわらず事前撮影に快くご協力くださいました皆様、また、当日ご臨席くださいました先生方に、心より御礼申し上げます。

保健看護学科2年生担任団 (栗原律子 安川 緑 佐藤慶如 山口さつき)

### 3. 学生及び学内関係者に与えた影響

#### 1) 挙行中の学生の態度や挙行後の様子

セレモニー開催時の学生の状況については、「動画を食い入るように見ていた」「私語は見られなかった」「統制が取れていた」「態度が良かった」等が観察されている。また、挙行後には会場の片付けを手伝う学生が多く、プレゼントの花を手にして学生同士で楽しそうに記念撮影する姿も見受けられた。また、学内関係者から、「会場から出てくる学生たちの明るい笑顔が印象的だった」との感想が聞かれた。

セレモニーでは、前半、祝辞や保健看護学科教員からの応援メッセージを順番に上映し、次に、学生個人が自らの「決意」を所定の紙に記載するという作業に取り組んでもらい（写真6参照）、能動的要素も取り入れられた。決意文には、職業に看護師を選んだ学生たちの力強い意思が反映されており、【これまでの自分とこれからの自分に区切りをつけて看護師を目指す自己の在り様を再確認する契機】となったことが伺えた。

#### 2) 「決意文」の公表による学内関係者への影響

決意文は後日、担任団によって、教員個々のメッセージも加えて1枚の模造紙にレイアウトされ、看護学科棟の1階渡り廊下に張り出された(図2)。掲示された決意文は他学年の学生の目に留まり、過去を振り返る上級生や、来年のことを話題にする下級生など、多くの学生が掲示に見入っている姿が観察されており、好影響を及ぼしたことが推察された。また、学内関係者においても、廊下を行き来する際に立ち止まって眺めたという人は多く、「看護の学生はしっかりしている」「こういう式典はあったほうがいい」などと口にされ、セレモニー開催の周知と、当学科の看護教育への理解を深めていただく上での貴重な機会となった。

#### 3) 参加学生のアンケート結果から

会場で配布した無記名式アンケートの集計結果（回収率100%）によれば、「事前にセレモニーの意義について理解していた」と回答した人は、56名中52名であった。「参加して良かった」「看護に対する理解や関心の向上に繋がった」と回答した人はそれぞれ56名全員であった。「プログラムで良かったことは何か」の質問（自由回答）で最も多かったのはエール・メッセージであった。内訳は「先輩（在学生）」が32名、「教員」が23名（学長、学科長と記載されたものも含む）、



図2. 学生の決意文と教員メッセージの掲示

「卒業生」が11名であった。このほか、「エール・フラワーのプレゼント」と回答した人が17名、司会・進行を高評価した記述が12名であった。また、「決意文を書いたこと」に関連した記述が5名あった。

会場設営に関する質問で「雰囲気良かったか」については、良かったと回答した人が55名（1名無回答）であった。「参加に際しての不安の有無」については、「土曜日開催である」ことを挙げた人が1名みられた。「改善点について」の質問には、「動画上映時、一部音楽が流れなかった」ことを指摘した人が1名、「平日開催を希望」する旨の回答が1名であった。

「全体を通した感想・要望」（自由記述）欄には24名の記入があった。そのうち12名は間もなく始まる基礎看護実習へ向けた意欲向上や抱負が記されていた。特に、自身の目標や決意をメッセージについて触れている人が5名で、「嬉しかった」「やる気につながった」「励みになった」「頑張りたい気持ちが強くなった」「身がひきしまった」「身にしみた」などの感想が記されていた。また、セレモニー開催への感謝の言葉を伝えている人が5名であった。このほか、「気持ちを新たに次に進む力になった。たくさんの方の協力を得られていること感謝」「気合が入った、看護師になるために頑張る」「有意義な時間となった」「楽しかった」「お花が嬉しかった」などの記載も認められており、セレモニーを機に、学生のモチベーションの向上や気持ちの切り替えへと繋がったこと、また、感謝の気持ちが深まったことなどが記載されていた。

## IV. 第13期生旭川大学YELLを終えて

旭川大学YELLは、看護師を目指す学生たちにとって、いったいどのような意味をもたらしたのだろうか。また、看護師育成に関わる教員や、学内外の関係者にはどのような気づきや影響を与えたのだろうか。以下に、その教育的効果や社会的意義について考察を加える。

### 1. 今年度の旭川大学YELLにおいて特に工夫された点について

挙行が決定した時期も遅く、またコロナ禍のため全員を集めた説明の機会をもつことができなかつたため、Teamsを通じて連絡調整を行った。当日の参加状況は58名中56名の参加を得て、混乱もなく盛会裏に終わることができた。

今回、祝辞／エールの詞を依頼した方々には事前収録に協力してもらい、編集動画を会場で上映する方法を採った。事前撮影時は、マイク、ライト、背景などにも気を配り、分割撮影を行うことで編集の利点を生かした作品に仕上げることができた。聴衆の気を逸らせないためには動画作品の完成度を上げる努力は不可欠である。学科教員からのメッセージは分野ごとに紹介するスタイルを採り、手動操作にて進めた。この時、音楽をCDで流すことになっていたのだが、テクニカル上のミスで音が出なかったのは残念であった。学生アンケートでは、(彼らにとって身近な存在である)教員からのメッセージが良かったと回答した者も多かった。上映後に、学科長からの祝辞／エールの詞と続き、学生たちを前にして力強いリアルメッセージが贈られた。こうしたメリハリのある演出は学生の気持ちを強く惹きつけ、奮い立たせることに役立ったと考えられる。今回用いられた事前撮影・上映という方法は初めての試みであり不安もあったが、大画面に映し出された映像により登壇者の表情、発する言葉がわかりやすかった等の利点も多く、今後もこうした演出方法は取り入れていきたいものである。

学生個々の「決意」をカードに記入するというプログラムは、実習直前の学生の目標の明確化や姿勢が定まるという点で意義があったと言える。また、その決意を人の目の触れる場所に貼りだされることでその約束を守り自らを律することへと繋がり、その後の学習にも身が入ったと言えよう。

上級生からの花のプレゼントは、受けとった学生に喜びの感情を引き出すと共に会場内に華やぎがもたら

され、演出効果を高めるシーンとなった。

最後の13期生代表学生のお礼の詞では、看護師になることへの決意と返礼が丁寧に述べられ、セレモニーのフィナーレにふさわしい締め括りとなった。

その後、会場内で記念撮影が行われ、学生たちの明るい笑顔と元気な声が会場内に響き渡り、全てのプログラムを終えた。

以上が今年度の旭川大学YELLの概要である。プログラム構成に工夫が加えられ、丁寧に作り込まれた上映作品が用意されたことや、会場設営ではスクリーンの見易さを考慮した上で、動線、照明、椅子の配置、横断幕の位置、壇上の雰囲気づくり等々、多方面から細かくチェックし設営されたことで、居心地の良い空間づくりに繋がったと言える。

### 2. 参加学生への教育的効果や関係者への波及効果

学生たちのスクリーンを見入る姿は真剣そのものであり、集中して参加できていた。アンケートからも、旭川大学YELLを通して学生たちは多くの事柄を吸収し、感動し、看護師を目指す決意を新たにすることが読み取れた。

また、セレモニーの開催を通じて、学内関係者へ本学科の教育や学生の動向などを伝える機会となった点は、大学全体で看護師育成を支援する機運を高める意味でも重要である。大学ホームページに挙行の概要報告を掲載したことにより、ステークホルダーである保護者をはじめ地域住民に本学科の看護師育成への取り組みを周知する機会となった。来年度の公立大学移行を視野に入れた広報活動の中でも取り上げてもらうなどして、一層の理解へと繋げ、発展させていくことが望まれる。

### 3. コロナ禍での挙行であることへの配慮

年度当初には、コロナ禍であることを踏まえると見送らざるを得ない、との見方が大半を占めていたが、幸いなことに、昨年8月から11月上旬までの間は小康状態となっていたため、計画を遂行することが出来た。自宅でのオンライン授業が長く続き外出も制限される状況の中、学生への悪影響も出始めた時期であったが、式典を挙行したことによって学生の気持ちも切り替わり、病院実習への目標も定まり、意欲向上に繋がった。コロナ禍を理由に消極的にものごとを決めるのではなく、学生にとっての必要性はどのような点にあるのかを熟慮した上で最善策を講じる姿勢は大切にすべきである。ただし、事前の説明や参加への動機付

けが不十分にならないための工夫や、感染防止策への努力は万全を期して行われなければならない。今回は Teams を活用した連絡調整（1 例として図 1 参照）を取り入れ、また、会場参加を大学関係者のみとして動画上映を行い、時間短縮及び密にならない等の配慮に努めたことにより、円滑かつ安全に挙行することが出来た。

#### 4. 旭川大学 YELL の果たしてきた役割と今後に向けて

旭川大学 YELL の生い立ちを辿ってみて判ったことは、それが、「戴帽式」の代替式典であることを意識して提案されたものではなかった、ということである。学生が初めて臨む「病院実習前の心の準備」として彼らの不安を軽減し、教員や家族からの応援＝YELL を再認識し励みとする機会を設けた、ということであろう。つまり、そのことを契機として学生はあらためて看護学を学ぶことの意味と向き合い、看護専門職としての使命と責任を自覚し、自分と自分を支えてくれている人々との間で看護師にふさわしい人間性の涵養に努めることを約束し、新たな誓いを立てる場と機会を学生に与える役割を担っているのが、旭川大学 YELL である。

しかし、そもそも「戴帽式」には上記のような学生の自覚を促し、職業的コミットメントを引き出し、不安を抑制するなどの安定化装置<sup>5)</sup>としての機能が内包されている。戴帽式はほとんどの場合、看護学生が初めて病院実習に出る直前の時期に挙行されており、旭川大学 YELL もその点では一致している。よって、本学の旭川大学 YELL が戴帽式に代わるものであるとの認識で間違っていない。ただ、宗教的意味合いの排除や、主従関係を結ぶ意図を含めたくない、との合理的選択は尊重されてしかるべきであろう。

セレモニーとして挙行することの本来の意義は、看護師を職業として選択した学生の職業社会化にある。また、通過儀礼としての意味合いも含まれている。A・ヴァン・ジェネップは、儀礼には 3 つの局面、すなわち、「分離／Separation、過渡／Transition、統合／Integration」があるとしている<sup>6)</sup>。旭川大学 YELL でたどった学生たちの変化をみていくと、短時間のうちにこの過程を経たことが確認できる。また、儀礼はハレとケに分類<sup>7)</sup>でき、非日常的要素を取り入れた演出効果を図ることには特別な意味がある。旭川大学 YELL は言うまでもなくハレの式典である。また、学生のアンケートで判るように「感謝の気持ち」が生まれていることに気づかされる。「感謝」とは、自分以外の

存在によってもたらされた恩恵に対して有り難いと感じる謙虚かつポジティブな感情のことである<sup>7)</sup>。牧らは、感謝するという肯定的な変化が「人格的成長」につながる<sup>8)</sup>ことを指摘しており、セレモニーを通して感謝の感情を引き出すことの意味は大きいと言える。教員側がこうしたことを意識して、より有意義な機会となるよう全体をプロデュースすることが重要であろう。

近代看護の創始者として象徴的存在でもある F・ナイチンゲールに学ぶ姿勢は大切にして、看護専門職として踏襲すべき事柄の検討を行い、良き伝統は後輩たちにも伝えられるよう支えていくことが我々教員の役割でもある。

旭川大学 YELL について、今一度、期待される学生への情操教育を含めた教育的側面への効果をはじめ、学内外への広報上の利点、新たな段階へと進むことを支持し祝う場・機会であることの確認、その中で学生の最も身近な存在である教員への期待と信頼等々を見直し、洗練させていくことが必要ではないだろうか。教員自らが式典に内在するその価値を理解して、看護学教育上の意義あるセレモニーへと高めるための努力を続けることが肝要である。

## V. おわりに

本稿では旭川大学 YELL が担ってきた役割や意義について整理し、コロナ禍での挙行概要について報告すると共に、その在り方や今後の課題について言及した。

旭川大学 YELL を通じて期待される多様な教育的効果を再認識して、ステークホルダーや外部機関、地域及び学内関係者への本学科看護教育にかかるアピールの機会に代えることができる等の付加価値にも着目して、現代的視点を加えたセレモニーのブラッシュアップを図り、唯一無二のユニークかつ優れた次代の看護師育成に備えたいものである。

今回、旭川大学 YELL の統括としてこのセレモニーに深く関わるチャンスを得たことで、従前において考え及ばなかった事柄への気づきや、視野の拡がりへと繋がった。時代が移りセレモニーの名称がどのように変わろうとも、“決意を新たにするセレモニー”には看護師という職業に求められる崇高さが保たれなくてはならない。看護学教育課程でのアイデンティティ確立にかかる場と機会をいかにして設けるのか、この命題は看護師育成において重要な視点である。筆者自身、

今後この点を意識しながら新たなテーマに取り組み、発展させていきたい考えである。

## 謝 辞

今年度の旭川大学 YELL の開催に際して、ご多忙中にもかかわらず深甚なるご理解、ご協力を賜った皆様に、あらためて心からの感謝を捧げます。

註：学生の写真掲載及び氏名公表については、事前に承諾を得ていることを付記します。

## 引用・参考文献

- 1) 長谷川美貴子：看護学生における職業社会化と職業意識との関連性，淑徳短期大学研究紀要，51，167-184，2012.
- 2) 同上
- 3) 佐々木秀美：ナイチンゲール方式による看護教育の特徴とその拡がり—教育の創造と伝承，看護学統合研究，14 巻 2 号，14-41，2013.
- 4) 本多ハワード素子：看護学生の職業社会化における戴帽式の役割，産業・組織心理学研究，16 巻 1 号，3-21，2002.
- 5) 高橋征仁・田中マキ子：看護学生における職業的アイデンティティとジェンダー—職業的社会化過程における表現主義的個人主義の形成—，社会分析，25 号，59-72，1997.
- 6) A・ヴァン・ジェネップ：秋山さと子・弥永信美訳，通過儀礼，思索社，1977.
- 7) Emmons, R. A., & McCullough, M. E. : Counting blessings versus burdens, An experimental investigation of gratitude and subjective well-being in daily life, Journal of Personality and Social Psychology, 84(2), 377-389, 2003.
- 8) 牧久美子・東豊：感謝の実践が Well-being に及ぼす影響—質問紙調査およびテキストマイニングによる分析，対人援助学研究，vol.9，13-29，2020.
- 9) <https://ja.wikipedia.org/wiki/ハレとケ>